

卒研発表会の準備

桂田 祐史

2018年2月10日, 2018年2月24日

<http://nalab.mind.meiji.ac.jp/howto/how-to-happyoukai/>

- 2月のどこかで、研究室単位 (いくつかの研究室で合同でやる場合が多い) で行う。一人当たり、10~15分の講演と5分程度の質疑応答時間が普通。
- $\text{T}_\text{E}\text{X}$ や PowerPoint など資料を使ってスクリーンに映すのがおすすめ。
- 百聞は一見にしかず、例をいくつか。
- 講演時間1分あたりスライド1枚が分量の目安。
- 各スライドには一つの話題。話題が見出しで分かるようにして、見出しを並べた目次のスライドを作ることを勧める。
- PowerPoint に十二分に慣れていない場合を除き、 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ を使うことを勧める¹。具体的には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_\text{E}\text{X}$ Beamer が現時点のおすすめ (桂田 [1] の11節などを見よ)。
- ソフトに非常に慣れていない限り、下書きは、紙を用意してシャープペンと消しゴムで作ることを勧める。
ローテクのようだけれど、案外と能率が良い。
- レポートとは違って、文を書く必要はない。箇条書きが適切な場合が多い。見出しに書いてある言葉も省略できるかも。
- 表、図を使うこと。
- 最後に「ご静聴ありがとうございました」を書く人がたまにいるが、その一言だけを書いたスライドを表示して質疑応答に入るよりは、結びのスライドか、参考文献表を見せておく方が有益である (そういうスライドの最後に「ご静聴…」とすれば良いと思う)。

参考文献

- [1] 桂田祐史: $\text{T}_\text{E}\text{X}$ 入門, <http://nalab.mind.meiji.ac.jp/~mk/labo/text/tex2017/> (2012~).

¹発表会が迫って、「PowerPoint で数式をどう入力するか分かりません」と言っているくらいなら (必要なことを自分で解決できる人が珍しくない一方で、どうすれば良いか分からないという人も全然珍しくない)、 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ を使うのが速い。現象数理学科の学生は否応無しにプログラミングも鍛えられているので、 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ の習得は案外速い。現象数理学科の学生の卒研の相手を2年やって、自分で出来ない学生には $\text{T}_\text{E}\text{X}$ を使わせる、が結論。